



愛隣幼稚園

園だより

22. 3月

愛隣の願い

温暖化と言われながら 2 月の気温は低かったようです。それでも先週末から暖かい風が吹き、どうやら春は目前のようです。本当なら心ときめく季節のはずですが、テレビのニュースに胸が痛くなり、遠くの地にある現実を受け止めることはできず、気持ちは沈んでいくばかりです。なぜ、私たちは平和の道を選択することができないのでしょうか。

先週も礼拝は分散で、クラスごとの礼拝でした。2月25日が愛隣幼稚園の創立記念日でしたから、愛隣幼稚園の前身である愛隣保育園が建てられた時のこと、幼稚園の名前でもある『愛隣』ということについて子どもたちにお話をしました。愛隣保育園は敗戦から間もなく、昭和24年に現理事長の父であり牧師である木下弘人によってこの地に建てられました。七夕空襲で千葉も焼け野原になり、たくさん子どもたちも戦火に巻き込まれました。家を失くし、家族を亡くした子どもたちも大勢いました。「昔、日本は外国の国と戦争をしました。戦争は武器を持って戦うことです。戦いと聞くと、何だかカッコいい感じがするけれど、戦争はカッコいいものではありません。日本でも、日本が戦った相手の国でも、たくさんの人が家を失くしたり、怪我をしたり、死んだりしました。たくさん子どもたちが悲しい思いをしました。千葉にも家が失くったり、ひとりぼっちになってしまったりした子どもたちがたくさんいたのです。それで理事長のお父さんが愛隣保育園を作りました。みんなが楽しい気持ち、嬉しい気持ちで遊べるようにと考えて作りました。みんなが仲良く、平和に暮らせることを、神さまは喜んでくださるからです。だから、愛隣幼稚園は戦いが嫌いです。戦争が嫌いです。みんなが悲しい思いをする戦争は絶対にしては駄目なんです。」そう子どもたちに話しました。そして、「愛隣ということ」についても、ご存知かと思いますが、これは聖書の中にある言葉です。ある人がイエス様にキリスト教の教えの中で最も重要な教えは何か、と聞いた時のイエスさまの答えです。ひとつが「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。」そしてもうひとつが「隣人を自分のように愛しなさい。」でした。(マタイによる福音書 22 章 34~40 節) 「隣人ってね、隣の友だちだけじゃなくて、家族も、町の人たちも、日本中の人たちも、いやいやそれだけじゃない、世界中の人たちが隣人だよってイエス様は言いました。その人たちを愛する、自分のように愛する、これは難しい。愛するは自分が好きな人を大切にすることだけじゃない。自分がしてほしいなと思うことを、相手にしてあげることなんだって。喧嘩してる時にもね。友だちがいなくて淋しい人がいたら、行って友だちになろう。喧嘩して怒っている時、きっと相手はごめんねって言ってほしいと思っているから、先にごめんねって言ってみよう。誰だって仲良くしたいと思っている、本当は喧嘩は嫌なんだ。愛するって難しい。でもそうやってみんなが仲良く楽しく平和に暮らせることは嬉しいこと。神さまもそれを喜んでくださる。」まさか、本当に戦争が始まるとは思いたくありませんでしたが、これが先週の礼拝でした。

年度の終わり、子どもたちは時間を惜しみ夢中になって遊びました。もり組の忍者たちは、連日、自分たちのあそび場を作るために巧技台を運び、終わりには片づけることを繰り返しました。ばら組の“深海6500”。休み中に先生が塗ってしまったのを見て「なんでひとりで塗っちゃったの〜。」と子どもが言いました。クラス間を子どもたちが行き交い、隔てなく言葉を交わし楽しいことを共有していました。相手の事を考え、助け合っていました。願った姿を子どもたちの中にたくさん見ることができました。創立者が願った楽しい幼稚園は、どこからか降ってくるわけではありません。ひとりの願い(祈り)から始まり、大人たちも主体者となる子どもたちも力を合わせ、自分たちの手で、自ら作り出していくものです。“平和”も同じです。他者によってもたらされるものではなく、私たちの手で作り出していくものです。但し、それは必ず非暴力で行われなければ意味がありません。神さまが私たちひとり一人を愛されています。私たちも互いを尊重し愛する者にならなければ、“平和”は訪れないのです。愛隣で撒かれた種は必ず芽を出し、実を結び新たな種が蒔かれます。みんなが楽しく争いのない平和な世界の始まりが、愛隣にあります。子どもも大人も“平和”を作りだす人になる。心から平和を願い、一刻も早く戦火が消えることを祈る3月です。